公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所

文化遺産ニュース

Cultural Heritage News from NARA

Vol. 25
March 2013

◎ 研修レポート 集団研修 1
◎ 研修レポート 個人研修（インドネシア） 2
◎ 国際会議 「伝統技術の継承と人材養成 ー 装飾:彩色・塗装を中心に ー」 3
◎ 文化遺産国際セミナー 「文化遺産を伝える“たくみ”の技ー イースター島、アンコール・ワット、そして飛鳥 ー」 4
◎ 文化遺産ワークショップ インドネシア・南カリマンタン州 マルタプラ 5
◎ インドネシア南カリマンタンの風景 ／ 世界遺産教室 6
インドネシア・バリ州の世界遺産

「藤原・飛鳥地域」臨地研修

集団研修

2012年9月4日（火）～10月4日（木）、アジア太平洋地域の16ヵ国から16名の研修生を招き、「遺跡・遺物の調査と保存」をテーマに研修を実施しました。

16名の研修生は、それぞれの国で政府機関、大学、研究所などに勤務し、文化遺産の管理、保護、修復に携わっています。研修では、遺跡や遺物の調査・保存修復・管理活用などの手法について学び、さらにはアジア太平洋地域での情報交換やネットワークづくりなども目的としています。

研修は、文化遺産保護制度や保存科学、環境考古学、年輪年代学などの考古科学分野だけでなく、実際に石器・土器を実測し、遺物の観察方法や実測図の描き方、また遺物や遺跡の写真撮影などの実習も多く取り入れています。また研修生それぞれが、自国の文化遺産保護に関わる実情について発表し、意見交換するなど、各国の研究者同士の交流もふかめました。

臨地研修では、奈良県内はじめ、各地の遺跡や文化財関連施設に赴くことによって、遺跡整備と管理・活用や遺物の管理・公開の実際を肌で感じ取ることができました。

写真実習

カリキュラム（概要版）

講　義
「日本の文化財保護制度」「考古科学概論」「文化財の危機管理」「年輪年代学概論」「遺跡・遺物の保存科学」など

実　習
「遺物の記録方法（土器・石器）」「遺跡・遺物の記録方法（写真）」

臨地研修
（奈良県）藤原宮跡・石舞台古墳・高松塚古墳・平城宮跡等
（他府県）吉野ヶ里遺跡・大宰府政庁跡等

報告・討議
研修生自国の「現状と課題」についての報告と意見交換

石器の実測実習

イクロム講師による講義

「吉野ヶ里遺跡」臨地研修

参加国　アフガニスタン、バングラデシュ、ブータン、カンボジア、中国、インドネシア、モルジブ、ミャンマー、ニュージーランド、パキスタン、スリランカ、タジキスタン、タイ、トンガ、ウズベキスタン、ベトナム

個人研修

2012年6月12日（火）～7月12日（木）、インドネシア教育文化省から3名の研修生を招いて「木造建造物の保存と修復」をテーマに個人研修を行いました。

研修生からのメッセージ

タン（Tang）さん

研修科目はすべて興味深くためになりました。特に興味をもったのが、「年輪年代学」と「文化的景観」でした。「文化的景観」は新しい概念なので、講義だけではなく実際の場所に行ってみたいと思いました。木造文化財の保存・修理や木材の種類などについていろいろなことを学んだので、帰国後は同僚に学んだことを伝えたいと思っています。

アザ（Aza）さん

日本の文化財保存について1ヶ月間にわたり詳しく学びました。「年輪年代学」、「建造物の記録法」、「写真」の研修を特に興味深く学びました。日本で学んだ事を将来インドネシアのために活用したいと思います。研修内容などすべてがうまく構成されていたと思いますが、もう少し時間がほしい講義もありました。

プリタ（Prita）さん

1ヶ月間多くの新しいことを学ぶ機会を与えていただいたことを感謝しています。研修科目はすべて興味深く、まず講義で理論を学び、実習というバランスがとれていました。このような研修をずっと続けてほしいと思います。もう少し時間がほしかったのは、「年輪年代学」と「博物館」でした。日本の人々はとても丁寧でやさしく接してくださり、ひと月の間快適に過ごせました。ありがとうございます。

2011年に続き、本年もインドネシア教育文化省から3名の研修生を招聘しました。インドネシアの国土は、数多くの島からなり、それぞれの島ごとに文化が異なります。島ごとに数多くの木造文化遺産があり、保存と修復が急務となっています。

研修では、木造建造物の保存・修復のための記録、調査方法、保存管理計画のほか、文化的景観や町並の保存についても学ぶ機会を設けました。また文化遺産の危機管理についても講義や実習を通じて実践的な研修を行いました。神戸を訪れた際には、阪神淡路大震災からの文化財復興を経験された兵庫県教育委員会文化財室長の村上裕道さんから臨地の講義を受けました。日本と同じく地震国であるインドネシアの研修生たちは、災害への危機管理について、関心を寄せているようでした。

こうした招聘国の要望に応じたカリキュラムを設定し、講義に当該国母国語の通訳を介して行うことができるのも、個人研修の強みです。これからも各国の要望に耳を傾け、きめ細やかな研修を開催したいと考えています。

「姫路城」臨地研修

「薬師寺」臨地研修

「年輪年代学」講義

カリキュラム（概要版）

講　義

「文化財建造物保存施策」「町並・集落の保存」「文化的景観の保存と制度」「木造建造物の記録・修理計画」「年輪年代学」「木材の性質と劣化」「文化遺産の危機管理」など

実　習

奈良市指定文化財・旧田中家住宅にて、木造建造物の実測実習。ならまち・元興寺にて写真実習「木造建造物の記録法」

臨地研修

（奈良県）
興福寺・春日大社・東大寺・薬師寺・唐招提寺・談山神社・法隆寺・今井町重要伝統的建造物群保存地区・正倉院など
（他府県）
清水寺・平等院（京都府）、姫路城・北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区（兵庫県）など

奈良市指定文化財・旧田中家 実測実習

記念写真

国際会議

2012年11月27日（火）～11月29日（木）、奈良県新公会堂にて、国際会議「伝統技術の継承と人材養成ー装飾:彩色・塗装を中心にー」を開催しました。

文化遺産保護に携わる各国の専門家を奈良に招き、２０１２年晩秋に国際会議「伝統技術の継承と人材養成ー装飾：彩色・塗装を中心にー」を開催しました。この国際会議は「伝統技術の継承と人材養成」をテーマに２０１０年度から継続して開催しているもので、３年目の今年は最終年になります。

奈良で第１回を開催した時は、建造物修理における法制度と木工を中心に、前回、中国・上海で開催した時は、石やレンガでできた建物などを修理・修復する技術を取り上げてきましたが、今回は、建物の最終的な仕上げという観点から、装飾、なかでも彩色・塗装を会議テーマの中心としました。

会議は、イクロムのデ・カーロ所長による「伝統的技術の継承と人材養成の国際的動向」で始まりました。伝統的な技術・技能について、ユネスコ等での国際的な取組のみならず、ギリシャ・ローマ時代の土器から現代の土産物的な物産にいたるまで取り上げた、広い視点からの講演でした。

イクロム所長 ステファーノ・デ・カーロ氏

会議風景

続いて、日本からは文化庁の大和智鑑査官が、伝統的な技術の保存と後継者の育成を中心に、日本における最新の取組について、中国からは同済大学の戴仕炳（ダイ・シビン）教授が、世界遺産である武夷山の岩に刻まれた碑文にみられる伝統的彩色と現代的彩色を例に、保存に関わる技術の伝承についての基調講演をおこないました。

参加各国（マレーシア、ネパール、スリランカ、ベトナム、タイ、ブータン、日本）の事例報告では、それぞれの国における装飾に関わる技術・技能の伝承をめぐる現状と課題についての報告が行われました。

最終日午後の総合討議では、講演と事例報告の内容を受けて議論が進み、歴史的建造物のような有形遺産を守り伝えていくためには、材料の確保や伝統的な技術の継承とともに、人材確保に向けての法的、財政的支援システムの確立が欠かせない点が、改めて指摘されました。

また、会議に先立って初日には、木造建造物を実際に修理している薬師寺東塔の現場と、白色顔料である胡粉を製造している工場を訪れました。薬師寺では、解体中の東塔を視察したほか、修理で用いる伝統的な道具を手にし、また、胡粉製造工場では乾燥工程を実際に体験したりしました。

薬師寺の資材加工場

胡粉工場の見学

イースター島モアイ像（写真提供:左野勝司氏）

文化遺産国際セミナー

2013年2月2日（土）、ならまちセンター・市民ホールで、文化遺産国際セミナーを開催しました。

ＡＣＣＵ奈良事務所では、より多くの方々に文化遺産の大切さについて理解を深めていただきたいと思い、これまで、毎年、文化遺産国際セミナーやシンポジウムを開催してきました。

今年は、アジア太平洋地域のみならず、ヨーロッパやアメリカ大陸など、広く地球上の各地で見られる石像や石造物を取り上げ、石を素材とした文化財・文化遺産を未来へ伝えていくために、これまで、どのように取り組んできたのか、国内各分野の専門家からお話しをしていただきました。

講演の最初は、奈良文化財研究所の高妻洋成さんによる「文化遺産を科学の目で診る」です。硬くて丈夫というイメージのある石も、水や地下水に含まれる塩類、さらには植物の根といった生物等が要因となって劣化することを、遺跡の写真を交えて解説されました。重要なのは、対象となる石を様々な方法で十分に調査して、適切な保存処理等の対策を講じた後の維持管理であると、専門の保存科学の立場からお話しをしていただきました。

会場風景

高妻洋成氏

左野勝司氏

続いて、石工の左野勝司さんの「石と対話して半世紀」は、長年石を扱ってこられたご自身の豊富な経験に基づくお話です。石材として用いられた凝灰岩については、イースター島や二上山でとれたサンプルを会場に回しながら、石の見方について、ユーモアを交えながら説明していただきました。また、謎とされるモアイ像の製作方法や運搬についても、これまで培われてきた石工としての技術と経験に基づいて、お話をしていただきました。

休憩の後は、講演された方々と奈良県立大学の田辺征夫さん、奈良文化財研究所の杉山洋さんの四名による座談会「文化遺産を伝える『たくみ』の技」です。冒頭、杉山さんから、現在アンコールの西トップ寺院で進められている保存修復事業の概要についてのお話がありました。その後コーディネーターの田辺さんの進行のもと、石の特徴（くせ）、石と木の違い、石に関わる技術の伝承、等について活発な意見が交わされました。

当日会場にお越しいただいた皆様からは、「話を聞いて石に対する見方が変わった」「文化遺産を守るのは人であると改めて思った」「楽しく、興味深く聞くことができた」といった声が聞かれました。

座談会

文化遺産ワークショップ

2012年10月15日(月)から10月20日(土)まで、インドネシア・南カリマンタン州(バンジャルバル／マルタプラ)で文化遺産ワークショップを開催しました。

記念写真　「ブブンガン・ティンギ」前にて

インドネシアには世界遺産としてボロブドゥールやプランバナンといった石造建造物がありますが、これらに加えて2012年には、「バリ州の文化的景観」が世界遺産に登録されました。これは木造寺院の他、棚田などの水利システムなどを含めた文化的景観全体を取り上げたものです。今回は、そのインドネシアからの要請を受けて、南カリマンタン州で「木造建造物の保存と修復」をテーマにワークショップを開催しました。インドネシア各地の文化遺産保護事務所や地方政府考古研究所などから18名が参加しました。

講義初日は、座学から始まりました。文化遺産博物館局のヘルミ局長が「インドネシアの文化遺産について」、つづいて、ガジャマダ大学のスラント教授から「インドネシアの木材とその特性について」の講義がありました。日本からは、文化財建造物保存技術協会の高品正行さんが「日本の木造建造物」について講義されました。

研修は、木造建造物の保存・修復のための記録、調査方法にとどまらず、保存管理計画をも視野に入れた内容でした。今回現地研修の対象とした建造物は、現地では「ブブンガン・ティンギ」「ガジャ・バリク」(それぞれ「高い屋根」「横たわる象」の意)と呼ばれる豪商の民家です。これらはマルタプラ川流域にみられる伝統的建造物群のなかでも代表的な建造物で、傷みがひどくなり修復を要する建物でした。研修生たちは、この建物の記録を作成し、どのように修復・保全・活用していくのか、1週間をかけてじっくり検討しました。

現地実習では、奈良県文化財保存事務所の高宮邦寛さん、奈良市文化財課の山口勇さんがそれぞれの建造物にわかれて、高品さんは研修全体の流れをみながら、適宜、研修生を指導しました。グループ発表を控えた最終日前日には、深夜まで発表の準備に追われました。グループ別の保全計画は具体的にどのように保全活用していくべきなのか、よくまとまった発表だったと講師の方々も、その成果に満足の様子でした。研修生からも実り多い実習だったという感想が寄せられました。

現地の物件や遺物を使用して研修を行う「ワークショップ」は、当該国の共催者からも高い評価を受けています。これからも当事務所では、各国の要望に添った現地研修を行って参りたいと考えています。

山口氏の実習　「ガジャ・バリク」にて

実測風景

高宮氏の実習　「ブブンガン・ティンギ」にて

グループ発表

インドネシア 南カリマンタンの風景

インドネシア・カリマンタン島（ボルネオ島）の南部を流れるマルタプラ川の流域では、川とともに暮らす人々の独特な生活風景をみることができます。人々は川辺に寄り添うように住居を建て、川を行き交い生活しています。小さなボートで川の中を進んで行くと、食料品や雑貨から棺桶まで必要な物のほとんどが手に入る世界です。

この地域の住居は高床を主体としていますが、いくつかに分類することができます。建物全体が川の中にある水上住居、一部が川の中に伸びている半水上住居、家屋は川縁の地上にあるが高床の形をしたものなどです。完全な水上住宅以外では、トイレと浴場（水浴）の機能を持つ小さな小屋を竹で束ねた筏の上に設けて、川に浮かべています。川の中に一定間隔でトイレが並ぶ独特の光景を見ることができます。

早朝に開かれる水運を利用した水上マーケットも珍しい風景の一つです。暗いうちからはじまり、明るくなった8時頃には終わります。売り船は残った品物をのせて帰って行きますが、陸上のマーケットへ再び出荷するようです。もともとは人びとが家と家とを行き来する程度の小さな船で買い物にきていました。その船の数は少なくなりつつありますが、近年では観光客の注目を集めるようになってきました。

マルタプラ川流域の水上家屋

川に浮かぶ船厠

水上マーケット

世界遺産教室

ACCU奈良事務所では、世界遺産や文化遺産を通じ、文化遺産保護の重要性を楽しく学んでいただきたいとの思いから、毎年、奈良県内の高校を訪問し、日本や諸外国の世界遺産についてお話しを聞く「世界遺産教室」を開催しています。今年は、開催校増の要望を受けて校数を増やし、奈良県内8校で開催致しました。

今年度の講師には、通訳としてご活躍の小野以秩子さん、フリーアナウンサーで世界遺産研究家の久保美智代さんに講師をお願いしました。講師の方々には、映像とクイズを交えたり、ご当地の文化遺産に関する話題をふんだんに盛り込んでくださったり、たくさんの企画をご準備いただきました。受講された生徒の皆さんも、楽しんで考える機会がもてた、ぜひ世界遺産を訪れたいとの感想が寄せられています。

五條高校の講義では、途中まで建設されたまま走ることのなかった五新鉄道や、賀名生梅林などの文化的景観にまで話しが及び、自分たちの街の文化遺産へ愛着をもつことの重要性に、大きく頷きながら、また涙ぐみながら話に耳を傾ける生徒さんもいました。

これから文化遺産保護をになう若い世代に、楽しく、そして深く文化遺産を学んでいただく「世界遺産教室」。この大切な機会を今後とも守り続けたいと考えております。

奈良朱雀高校で講義する小野以秩子さん

十津川高校で講義する久保美智代さん

Vol. 25
March 2013

文化遺産ニュース

〈発行〉公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産保護協力事務所

インドネシア・バリ州の世界遺産

表紙の写真：タマン・アユン寺院

インドネシアの世界遺産には、これまでに3つの文化遺産と4つの自然遺産がありましたが、2012年、「バリ州の文化的景観」が新たに加わりました。

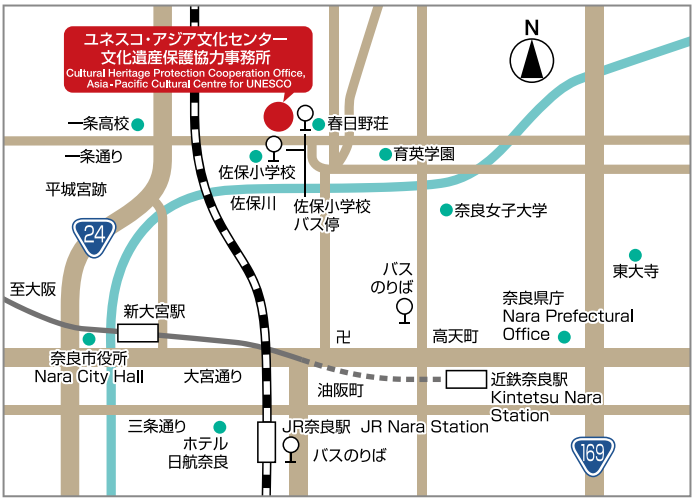
その中で、バリ島中部にあるタマン・アユン寺院（表紙）は、もともと王国の国寺として建てられた重要な寺院の一つで、境内には多くの多重塔と庭園が広がっています。

ウルン・ダヌ・バトゥール寺院

バリ島北部、バトゥール山の火口湖を見下ろす景勝の地にある寺院です。もともとは湖畔にあったのですが、2度にわたる火山の大噴火の後、現在の地に移されました。火炎を思わせるような独特な門が特徴的で、境内には曼荼羅を模して多くの多重塔と建物を配置しています。

ジャティルウィの棚田

バリ島中部の穀倉地帯タバナン県には、数多くの棚田が広がっています。これらは、水路や堰によって共同で水を管理する灌漑システムによって維持されています。なかでも、このジャティルウィ村の棚田は、もっとも雄大で美しいと言われています。



公益財団法人
ユネスコ・アジア文化センター
文化遺産保護協力事務所
Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO

〒630-8113　奈良市法蓮町 757（奈良県奈良総合庁舎1 階）
TEL 0742-20-5001
FAX 0742-20-5701
URL http://www.nara.accu.or.jp
E-mail nara@accu.or.jp

交通アクセス

近鉄奈良駅から
- 徒歩約 20 分
- バス 13 番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ

JR 奈良駅から
- 徒歩約 25 分
- バス 7 番のりばから「西大寺駅行き」または「航空自衛隊行き」で、佐保小学校下車すぐ